

(説教者：孟一博神学生)

神の選び

(一コリント一・一八〜三一)

日本語を学びだして間もない頃に聞いたある昔話を忘れることが出来ない。ある日お百姓のおじいさんが人を食うと恐れられている天狗に出くわした。「どうせ食われて死ぬならば」とおもった爺さん、「せめて冥土の土産にでも」と天狗に変身術を見せてほしいとすり寄った。すっかり「てんぐ」になったかの天狗、まずは雲を突き抜けるほど大きくなって見せた。それを見たじいさん、今度は小さくなるようにと懇願した。「では見せて進せよう」と言つて豆粒ほどに小さくなったとき、百姓爺さんは迷いもせず掌の天狗をバクリと食べてしまったとき、というお話である。

天狗は伝説の神のひとりでもあり、賢いと言われている存在だ。だがその傲慢さのゆえに、百姓爺さんに翻弄され、最後は食べられてしまった。人間が人以上の存在に勝つ。人の知恵を称賛する物語だ。時に今日見ていく聖書の言葉はこの流れとは反対だ。以下三つの事を学びたい。

一、同じことば、異なる運命

まず知らねばならないことは十字架

のことばは受け取り方によって異なる運命をもたらすという事実である。人の見方によつて、十字架は「愚かなもの」にも、「神の力」にもなりうる。いや異なるどころか「真逆」である。十字架上のイエスに救い主の威厳と栄光を見ることはどう見ても不可能だ。彼は死刑囚なのだから。鞭で打たれ、血を流し、苦しげに息を吸い、そして死ぬ。こんなイエスを信じる者が罪ゆるされ、天国の祝福を受け継ぐなどという知らせは人間的に見ればどうしたつて「愚か」である。だがもし人が神によつてなされたその業、即ち十字架のことばをその愚かさのまま受け入れるなら、その人は救いと言ふ神の力を体験できるのだ。

二、人の愚かさとは神の知恵

「百姓爺さんと天狗」を思い起こせばそこにあるメッセージは傲慢の恐ろしさである。天狗は傲慢のゆえに墓穴を掘つた。我々もこの傲慢に注意せねばならない。いかに人間の目には愚かに見えるとはいえ、十字架のことばによつて救いを与える神をあざ笑うべきではないのだ。天国の門は決して人間の知恵や能力、努力によつて開かれるものではなく、十字架につけられたイエスを信じることだけに救いがある。これが聖書の証言である。これを「愚かなもの」として受け入れない傲慢な者は救いへの門を自ら閉ざしてしまうのだ。ここに知恵者だと自負する者たちの陥穽があるのだ。とい

うのも愚かなことによつて、「知恵あるものの知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなくする」ことが神にはおできになる。そして、この人にとつてはおろかに見える知恵を持つておられる神こそ、実に人間の救いの主権を握つておられるお方なのだ。この逆説を大切にしたいのだ。

三、誇る者は主を誇れ

聖書は神がお選びになつた人々のことを「この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません」と語っている。これらの者には一つの共通する特徴がある。つまりこれらの人々はみな誇るものがないということである。あるとすればそれは一つ。何もない私を選び、救つてくださった神だけである。しかしこのように自らの欠乏と無力さを思い知らされて神により頼む者を神は決して捨て置かれることはない。むしろこの無産、無能、無力な彼らを通して神はご自身の栄光を現されたのである。考えてみよう。イエスの最初の弟子たちはどのような者達であつたらうか。イエスは十二人の弟子を選ぶために徹夜して祈られた。だから彼らは無作為抽出されたものではない。イエスは確かに彼らを「選んだ」のだ。だが選ばれた十二人はといえば漁師やら取税人やら当時の世界の観点から見ても取るに足らない者ばかりであつた。しかし、これらの「無に等しい者」たちがこそが神の福音を人々に届け、世界をひ

つくり返した。これが宣教の歴史である。だとすればその誇りは、その業をした彼ら以上に、彼ら無能な者を召し出した神に帰されなければならないのである。

* * *

「彼」は生まれつき臆病な男だつた。不幸な家庭に生まれたこともあり、少年時代から心に傷を抱え、劣等感にさいなまれていた。口下手で、まとまつた話をすることも苦手だつた。人の前に立つと緊張のあまり、体はこわばり、声は震える。当然人は彼を笑い、後ろ指を指す。彼は益々しゃべれなくなる。立派な悪循環だ。そんな彼の人生にも光が差した。イエス・キリストに出会つて救われたのだ。そして二六歳の時、彼は伝道者になる使命を頂いた。しかし彼はすぐに素直になれなかつた。「こんな口下手で弱虫の自分がどうして十字架のことばを語る事が出来よう」と思つたのだ。しかし聖書を読んでいる中で、彼は神のみこころを体験した。「この世のとるに足りない者や見下されているものを、神は選ばれました(二八節)」を読み、励まされた彼は神の召しに応答し、今ここで母国語ではない言葉で神の言葉を取り次いでいるのだ。ハレルヤ！

神の選びは一方的だ。私たちの都合や評価は関係ない。友よ、「自分はああだから、こうだから」というのを中斷し、人の知恵を超える神の愚かさにゆだねてみようじゃないか。救いはそこにある。